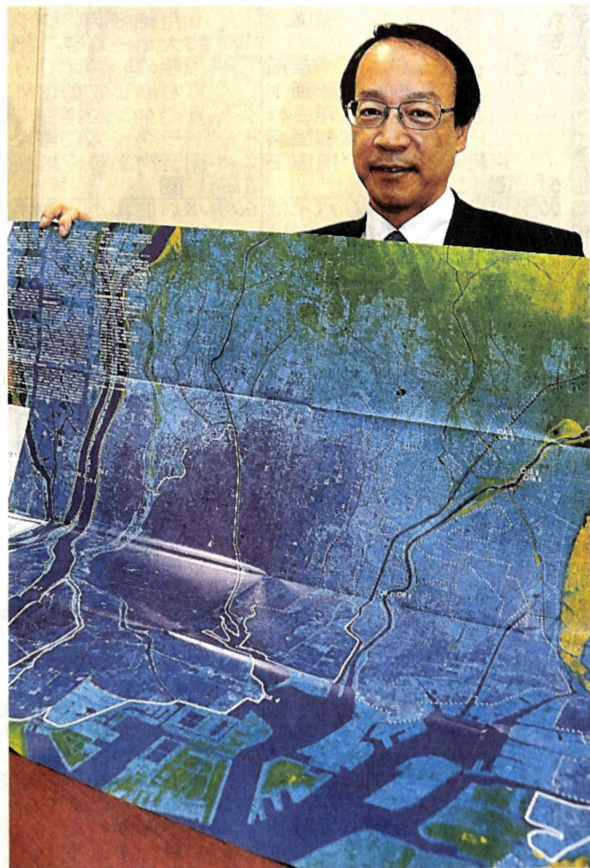


# 名古屋沿岸の高低 一目で

## 郷土史家が防災地図



防災地図を広げる北見さん。名古屋港沿岸は土地が低く、真っ青に染まっている＝名古屋市中区

### 標高色分け十過去の浸水分布

### 「陸地真っ青ぞっとした」

名古屋市の郷土史家がつくった名古屋港沿岸の防災地図が、じわりと売り上げを伸ばしている。シミュレーションではなく、実際の標高を色分けして伊勢湾台風の浸水分布を重ねたシンブルな地図で、土地の高低が一目で分かる。「自分の住む土地について知ってほしい」と話している。

地図は、土地の高い所を赤、低い所を青に色分けした国土地理院の「デジタル標高地形図」が基になっている。縮尺は2万5千分の1で、市街地の区画が分かる。ここに、1959年の伊勢湾台風で長期間浸水した地域の分布を白線で書き加え、主な川の堤防の高さ、古い地名から、かつ

ては池や田んぼだったと見られる場所に印を付けるなどして、A1判のポスターに印刷した。

作ったのは名古屋市区の郷土史家で、本業は経営コンサルタンの北見昌朗さん(53)。昨年3月の東日本大震災で津波の脅威を目の当たりにし、以前から気になっていた名古屋周辺

の土地の高さを調べ始めた。インターネットで史料を検索していたところ、たまたま地理院の標高図を見つけ、衝撃を受けた。

「陸地が、海と同じ色をしてきた。ぞっとした」

知人や取引先などに尋ねても、標高図を見たことがある人はいなかった。名古屋市のハザードマップには、土地の標高までは載っていない。「事実を多くの人に知って欲しい」と、地図作りを決意。過去に東海地方を襲った地震の歴史や土地の成り立ちなどの豆知識も集約して、

半年ほどかけて完成させた。地図には、東は名古屋市天白区から、西は三重県木曽岬町までの沿岸部が描かれ、北は愛知県春日井市や稲沢市辺りまでが収められている。青く染まる愛知

知県津島市、弥富市、三重県木曽岬町など、標高が0メートルを下回る沿岸部の多くは、伊勢湾台風で「1カ月以上」浸水。名古屋市の港、南、中川区なども「1日〜1カ月」浸水が続いたことがわかるようになっていく。

東海地域は過去に何度も水害を繰り返しているが、「53年前の伊勢湾台風の経験を、いま実感としてわかる若い人は少ないのではないかと。自分の住む土地がどんな場所かを知ってほしい」と北見さんは話している。

地図は1部500円。三洋堂書店(名古屋瑞穂区、電話0120・2220・285)が、

愛知・三重両県の沿岸部にある約20店舗で扱っている。昨年、2店舗で景品として配ったところ、「欲しい」という声が多く、今年から販売を始めた。すでに800部以上が売れている。

元図の「デジタル標高地形図」は、国土地理院のウェブサイトで見られる。(鈴木彩子)